岡山大学経済学会雑誌17(3・4), 1986, 349～367

『帝国主義論』の性格についての覚書

——帝国主義論史研究の視角から——

太　田　仁　樹

目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　『帝国主義論』の構成
Ⅲ　『資本論』の方法
Ⅳ　『金融資本論』の方法
Ⅴ　『帝国主義論』の方法
Ⅵ　むすび

Ⅰ　はじめに

1970年以降わが国において帝国主義論史についての研究が進展し，多くの個別研究が発表されるとともに，古典的な諸学説についての系譜的位置付けの試みも進んでいる。通史的な経済学史の講座や著作のなかで諸学説について論述されることも多い。帝国主義研究といえばもっぱらレーニン『帝国主義論』の解説に終始していた時代とは様相を異にしてきたといってよい。しかしながら，様々な論客の帝国主義論が解明されてはいるが，その評価は伝統的に理解されてきたレーニン『帝国主義論』を基準としてなされていることが多い。たとえば近年多くの研究がおこなわれているヒルファディングの帝国主議論についても，ヒルファディングの積極面はレーニンと一致してい

る点にもとめられることが多い。[1] その場合の指標は段階認識の確立という点である。筆者は，先に古典的な帝国主義論のうちヒルファディングとローザ・ルクセンブルクの主著を検討し，レーニンについても若干の言及をおこなった。[2] 本稿においては，レーニンのこの『帝国主義論』の論理構造に再度光をあて，段階認識と帝国主義認識の問題について，補足的な考察を加えようとするものである。

II 『帝国主義論』の構成

『帝国主義論』執筆のねらいを，「フランス語版とドイツ語版の序文」(1920年）において，レーニン自身はつぎのように述べている。

「本書の基本的な任務は，すべての国の争う余地のないブルジョア統計の総括的資料とブルジョア学者たちの告白とにもとづいて，国際的な相互関係における世界資本主義経済の概観図が，20世紀の初めにすなわち最初の全世界的な帝国主義戦争の前夜に，どのようなものであったかをしめすことであったし，今もなおそうである。」[3]

---

(1) たとえば，保住敏彦『ヒルファディングの経済理論』梓出版社，1984年の第4章「ヒルファディングの帝国主義論」をみよ。この点，例外的なのは，星野中のつぎの指摘である。「帝国主義論は，具体的事実の具体的な連関によって叙述する点で『資本論』とは異なる方法をもつのだとすれば，それなりに因果関係を追究する固有の方法がなければ論理にも科学にもなり得ない。ヒルファディングが明らかにした支配的資本の蓄積の特質→そこから生ずる矛盾→外的な対立関係という因果関係追究の形は，そうした点で重要な意味を持つものと考えられるが，レーニンがそうした論理をほとんど排除しているのは，後退といわざるを得ず，レーニンの帝国主義把握の方法の限界を示しているのである。」杉原四郎・真実一男（編著）『経済学形成史』ミネルヴァ書房。1971年，275ページ。

(2) 拙稿「帝国主義論における世界経済認識——ヒルファディング，ルクセンブルク，レーニン——」(上)，(下)『経済科学』(名古屋大) 第32巻第2号，第3号，1984年，1985年．本稿は，この前稿に対して，補足的位置を占めるものとなっている。研究史などに関する注記は，本稿においては最小限にとどめたことを断っておきたい。

(3) *PSS.*, t. 27, str. 303. 22巻，217ページ．レーニンからの引用は，*V. I. Lenin Polnoe sobranie sochineniĭ*, Izdanie piatoe, Izdatel'stvo politicheskoĭ

世界経済の概観図をしめすというこの目的は，レーニンの場合単なる経済学的関心から生じたものでは勿論ない。彼を帝国主義研究に専念させたのは，1914年の世界大戦の勃発とその後の社会主義者の態度の混乱であった。帝国主義についての理論的認識の確立こそ，社会主義者のうちに蔓延する日和見主義を克服するのに必須の課題であると思われた。世界経済の概観図をしめすということもこの課題をはたすことに他ならない。先の引用につづいてレーニンはつぎのように語っている。

「1914—1918年の戦争は，どちらの側からしても帝国主義戦争（すなわち，侵略的，強奪的，略奪的な戦争）であり世界の分けどりのための，植民地や金融資本の『勢力範囲』等々の分割と再分割のための戦争であった。というのは，ある戦争の真の階級的性格がどのようなものであるかということの証明は，言うまでもなく，その戦争の外交史のうちにではなく，すべての交戦列強の支配階級の客観的立場の分析のうちにふくまれるものだからである。この客観的立場を描きだすためには，幾つかの実例や個々の統計数字をとりだすべきではなく，……ぜひともすべての交戦列強と全世界の経済生活の基礎に関する資料の総体をとりあげなければならない。」(4)

すなわち『帝国主義論』執筆の目的は，第一次世界大戦の「真の階級的性格がどのようなものであるか」ということの解明にあり，それがどちらの側からしても「侵略的，強盗的，略奪的な帝国主義戦争」であることを証明し，日和見主義を批判することであった。このような目的で書かれた著作において，『資本論』をその核心とするマルクスの経済学がどのように適用されているのか，この点こそ検討すべき論点である。

『帝国主義論』の編別構成は以下のとおりである。

---

literatury, Moskva.（*PSS.* と略記）からおこなう。なお，訳文は『レーニン全集』大月書店に拠ったが，適宜変更した場合もある。

（4）*PSS.*, t. 27, str. 303－304. 22巻，218ページ.

1．生産と集積と独占体
2．銀行とその新しい役割
3．金融資本と金融寡頭制
4．資本の輸出
5．資本家団体のあいだでの世界の分割
6．列強のあいだでの世界の分割
7．資本主義の特殊の段階としての帝国主義
8．資本主義の寄生性と腐朽
9．帝国主義の批判
10．帝国主義の歴史的地位

以上10章の構成となっているのであるが，『帝国主義論』は三つの部分にわけて考えることができる。最初の7章は「純経済的概念」を展開した理論的な部分であり，第8・9章は「寄生性と腐朽」という認識を基礎にしたカウツキーに対する批判，第10章は全体の総括であり，「死滅しつつある資本主義」としての帝国主義の確認と考えることができる。このことは第1—6章を小括する位置にある第7章のつぎの叙述からも明らかである。

「つぎの五つの基本標識をふくむような帝国主義の定義をあたえなければならない。すなわち(1)生産と資本の集積。これが高度の発展段階に達して，経済生活で決定的な役割を演じている独占体を作り出すまでになったこと。(2)銀行資本が産業資本と融合し，この『金融資本』を基礎として金融寡頭制がつくりだされたこと。(3)商品輸出とは区別される資本輸出が，とくに重要な意義を獲得していること。(4)資本家の国際的独占団体が形成されて，世界を分割していること。(5)資本主義的最強国による地球の領土的分割が完了していること。帝国主義とは，独占体と金融資本との支配が成立して，資本の輸出が顕著な重要性を獲得し，国際トラストによる世界の分割が始まり，最強の資本主義諸国によるいっさいの領土の分割が完了した，そういう発展段階の資本主義である。あとでなお見るように，もし

基本的な純経済的概念（前述の定義はこれにかぎられているが）だけではなく，資本主義のこの段階が資本主義一般にたいしてもつ歴史的地位，あるいは労働運動における二つの基本的傾向と帝国主義との関係をも考慮に入れるなら，帝国主義はこれとは別様に定義することができるし，また定義しなければならない。」[(5)]

この理論的部分での定義を高須賀義博は「特徴列挙型分析」とよんで，マルクスの場合とは経済学の方法論の上で決定的に異なったものであるとしている。[(6)] 高須賀は「マルクスの場合は，資本主義の一特定段階の特徴や性格は何かということよりも，むしろもっと根本的に資本主義とは一体何であるかを体系的（概念的）に明らかにする理論を構築することを目指したのですが，レーニンの場合には，資本主義の一般理論はマルクス大先生がすでに解明したということを前提として資本主義の新しい特徴を摘出し，それが社会主義革命にとってどういう意味をもつかということを『管制高地』の経済学として明らかにしてゆくわけであります」[(7)] と両者の相違について述べている。しかしながら，マルクスの『資本論』を「一般理論」として前提して資本主義の新しい特徴を摘出し，「管制高地」の経済学として明らかにしたというだけでは，レーニン『帝国主義論』の理論的部分の特徴付けとしては不十分であろう。『資本論』を前提として，資本主義の新しい特徴を摘出し解明しようとしたのは，カウツキー，ヒルファディングの場合も同様だからである。問題はその解明の仕方が『資本論』の方法とどのように相違し，どのように関連付けられているのかにあるといえよう。

『帝国主義論』を執筆するにあたって，レーニンが『資本論』を非常に意識していたことは，その論述の最初の部分と末尾において『資本論』の命題

（5）*PSS.*, t. 27, str. 386－387. 22巻，307－308ページ.
（6）高須賀義博『マルクス経済学の解体と再生』御茶の水書房，1985年，58ページ.
（7）同書，59ページ.

を確認していることからも明らかである。最初の部分というのは，生産と資本の集積による独占の形成をドイツ，アメリカ，イギリスの具体例について検討した後に続く第1章の叙述である。[8] 末尾での叙述は，帝国主義は死滅しつつある資本主義であるという論点にかかわるものである。そこでレーニンは，リーサーとシュルツェ・ゲファーニッツをひきあいにだして「ブルジョア経済学者達」も集積の進展による「生産の社会化」の進展を事実上認めざるを得なくなっていることを指摘している。[9] 『資本論』における集中・集積論およびそれと表裏をなしている社会化論の延長上に，レーニンは『帝国主義論』の論理を位置付けようとしている。

では，『帝国主義論』の論理，特に第7章までの「純経済的な概念」の展開は，『資本論』の方法と同じものなのか違ったものなのか，違っているとするならその相違は如何なるものなのか，つぎに『資本論』の論理展開の方法的特徴を瞥見してみよう。

Ⅲ　『資本論』の方法

『資本論』の展開は高須賀もいうように「根本的に資本主義とは一体なにであるかを体系的（概念的）に明らかにする理論」といいうるのであるが，それはいわゆる「上向法」による展開である。この方法についてマルクス自身が述べたものとしては，「経済学批判序説」におけるつぎのような論述が著

（8）「半世紀まえにマルクスが『資本論』を書いたときには，自由競争は，圧倒的多数の経済学者にとって『自然法則』のように見えた。マルクスは，資本主義の理論的および歴史的分析によって，自由競争は生産の集積をうみだし，この集積はその発展の一定段階では独占に導くということを証明したが，官学はこのマルクスの著書を黙殺という手段によって葬りさろうと試みた。だが，いまや独占は事実となった。経済学者たちは山なす書物を書いて，独占の個々の現われについて記述しながらも，口をそろえて，『マルクス主義は論破された』と言明しつづけている。だが，イギリスのことわざも言うとおり，事実は曲げられないものであって，いやでもおうでもそれを考慮に入れなければならない。」（*PSS.*, t. 27, str. 314－315. 22巻，229－230ページ）

（9）*PSS.*, t. 27, str. 424－426. 22巻，349－352ページ参照.

名である。

「具体的なものが具体的であるのは，それが多くの規定の総括だからであり，したがってまた多様なものの統一だからである。それゆえ具体的なものは，それが現実の出発点でありしたがってまた直観や表象の出発点であるにもかかわらず，思考では総括の過程として，結果として現われ，出発点としては現われないのである。……ヘーゲルは，実在的なものを，自分のうちに自分を総括し自分のうちに沈潜し自分自身から運動する思考の結果としてとらえるという幻想におちいったのであるが，しかし抽象的なものから具体的なものにのぼっていくという方法は，ただ具体的なものをわがものとし，それを一つの精神的に具体的なものとして再生産するという思考のための仕方でしかない。」(10)

『資本論』の展開はこのような意味での概念化(Begreifen)の過程そのものなのであり，高須賀のいう「体系的(概念的)」な解明の理論というのもこのような意味であろう。このような展開方法によって描かれる世界はつぎのような性格をもつものであることは留意すべきである。すなわち『資本論』の「第2版後記」でマルクスは述べている。

「叙述の仕方は，形式上，研究の仕方とは区別されなければならない。研究は，素材を細部にわたってわがものとし，素材のいろいろな発展形態を分析し，これらの発展形態の内的な紐帯を探りださなければならない。この仕事をすっかりすませてから，はじめて現実の運動をそれに応じて叙述することができるのである。これがうまくいって，素材の生命が観念的に反映することになれば，まるで先験的な(a priori)構成がなされているかのように見えるかもしれないのである。」(11)

---

(10) *MEW.*, Bd. 13, S. 632. マルクスからの引用は，*Karl Marx－Friedrich Engels Werke*, Dietz Verlag, Berlin (*MEW.* と略記) からおこなう。訳文は『マルクス・エンゲルス全集』大月書店に拠ったが，適宜変更した場合もある。

(11) *MEW.*, Bd. 23, S. 27.

すなわち，こうした展開方法によって描かれる世界は，経験的な事物からは切りはなされ「先験的」に構成されているかの如き様相を呈するのであり，それはアルチュセールの強調する「理論的実践」の所産の世界なのである。[12] したがって例解としてイギリスがひきあいにだされてはいるが，『資本論』は決して19世紀中葉のイギリスという特定の時代，特定の国における具体的な資本主義を分析した著作ではない。

以上の点をふまえて『帝国主義論』との比較という問題意識をもって『資本論』の理論的性格を考えるとき留意すべきいま一つの問題は，マルクスによる『資本論』の対象領域の限定である。『資本論』の描く世界は，一国民経済内部での資本の運動を「理念的平均」においてしめすものであるといえよう。[13] それに対して『帝国主義論』は，「純経済的な部分」（1－7章）の叙述に限定しても，特定の時代（第一次世界大戦前夜）における，具体的な諸列強の世界経済上の対立・抗争を描いているものである。この点をみれば，『資本論』と『帝国主義論』の二つの著作の相違は顕著である。

しかしながらレーニン自身は，生産と資本の集積から始まる五つの標識を『資本論』の上向的論理展開を引き継ぐものとして展開しているのではないのか。あの五つの標識による展開は単に諸特徴を「列挙」したものではなく，上向的な概念化の過程なのではないのか。その意味で『帝国主義論』は「独占段階」の「資本主義とは一体何であるかを体系的（概念的）に明ら

---

(12) Altusser, L. et E. Balibar, *Lire le Capital. I*, Maspero, 1968, p. 46ff. 邦訳『資本論を読む』合同出版，1974年，50ページ以下参照.

(13) 「生産関係の物象化の叙述や生産当事者たちにたいする生産関係の独立化の叙述では，われわれは，諸関連が世界市場，その景気変動，市場価格の運動，信用の期間，産業や商業の循環，繁栄と恐慌との交替をつうじて生産当事者たちにたいして圧倒的な，彼等を無意志的に支配する自然法則として現われ，彼等に対立して盲目的な必然性として力をふるう仕方には立ちいらない。なぜ立ちいらないかと言えば，競争の現実の運動はわれわれの計画の範囲外にあるものであって，われわれはただ資本主義的生産様式の内的編成をいわばその理想的平均において示しさえすればよいのだからである。」（*MEW.*, Bd. 25, S. 839）

かにする」理論と呼ぶべき性格，すなわち「独占資本についての一般理論」という性格をあわせもっているのではないのか。このような反論がありうるし，またそうした議論は伝統的に有力な解釈であった。この問題についてたちいって考察するまえに，『金融資本論』を介在させて，『資本論』と『金融資本論』，『金融資本論』と『帝国主義論』の論理的関係について若干の議論をおこなうことが有益であると思われる。

Ⅳ　『金融資本論』の方法

『金融資本論』はレーニンの帝国主義研究においてもっとも重要な意味を持つ著作である。『帝国主義論』の「序章」において，レーニンは自分の研究に先立つ有意義な帝国主義研究としてヒルファディング『金融資本論』とホブスン『帝国主義論』とを挙げているが，理論的部分（第1—7章）に対する『金融資本論』の意義は決定的である。従来のヒルファディング評価は，『帝国主義論』の「第3章」の冒頭でのヒルファディングの金融資本概念に関する論評[14]の前半部分のみをとりあげて，流通主義というレッテルを『金融資本論』に対してなげかけてことたれりとしてきた。[15]しかし，このような『金融資本論』評価は近年のヒルファディング研究の進展のまえには維持しがた

(14)「この定義は，そのなかでもっとも重要な要素の一つ，すなわち生産と資本との集積は，それが独占に達しつつあり，またすでに達したほどの度合にあるということ，が指摘されていないかぎりでは，不完全である。もっとも，一般にヒルファディングの叙述全体のなかでは，とくにこの定義をとってきた章のまえの二つの章では，資本主義的独占体の役割が強調されている。

生産の集積，そこから成立してくる独占体，銀行と産業との融合あるいは癒着，これが金融資本の発生史であり，金融資本の概念の内容である。」（*PSS.*, t. 27, str. 343. 22巻，260ページ）

(15)「帝国主義論ノート」における「ヒルファディングの欠陥」は，(1)貨幣論についての理論的あやまり，(2)世界市場分割の（ほとんど）無視，(3)金融資本と寄生性との関連の無視，(4)帝国主義と日和見主義との関連の無視という4点が挙げられているのみであり，独占の役割の無視という批判はない。*PSS.*, t. 28, str. 178. 39巻，166ページ参照。

いものとなっている。『帝国主義論』は，レーニンが帝国主義研究を開始した当時，帝国主義についての最高の理論水準をしめしていた『金融資本論』をレーニン独自の視角から再構成したものである，と考えることも出来るのである。

『金融資本論』は『資本論』を前提として資本主義の新しい特徴を摘出し，それが社会主義革命にとってどういう意味をもつかということを明らかにする書物であるから，高須賀流にいえば「管制高地」の経済学ということができるかもしれない。しかしながらヒルファディング自身のめざしているのは，『資本論』の延長・発展としての「一般理論」であった。『金融資本論』の『序言』の冒頭で彼自身つぎのように語っている。「本書では，最近の資本主義的発展の経済的諸現象を科学的に把握するという試み，すなわち，この諸現象をW・ペティに始まりマルクスにおいてその最高の表現を見出す古典的国民経済学の理論体系に，組み入れるという試みがなされる。」(16) そして，実際に『金融資本論』の第1—4章のいわゆる理論的部分は，「独占段階」における「資本主義とは一体何であるかを体系的（概念的）に明らかにする理論」となっているのである。ヒルファディングは，『資本論』の論理レベルを「資本一般」ととらえたうえで「資本主義の一般理論」としては未だ不十分であると考え，貨幣論，信用論，信用制度論，恐慌論を自ら展開し，さらに自由競争から独占の段階への資本主義の移行を，資本主義の一般理論から上向的に展開した。この二つの論理展開が截然と区別されることなく錯綜して展開されており，また個々の議論も多くの問題点をはらむものであるがゆえにきわめて難解ではあるが，古典的な諸帝国主義論のなかで経済学的には最も内容豊かな著作となっている。

---

(16) Hilferding, R., *Das Finanz Kapital: Eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus*, Europäische Verlagsanstalt, Frankfurt am Main, S. 17. 邦訳『金融資本論』(上) 岩波文庫，1955年，9ページ．なお訳文は適宜変更した場合もある。

ここで確認しておきたいのは，まず，『金融資本論』における独占資本の運動の解明は，『資本論』の上向的論理展開の延長上に位置付けられる性格をもっているということ，したがって，マルクスの表現を借りるなら「先験的」な構成がなされているかの如き展開になっているということである。先行する諸研究が明らかにしているように『金融資本論』の展開には，当時のオーストリアの経済事情が反映しているのではあるが，論理そのものは，特定の時代，特定の国に限定されず，「独占段階の一般理論」としての展開が意図されている。

つぎに，確認すべきなのは，このような論理展開によって描かれる世界は一国民経済の内部に限定されているということである。信用や産業循環を捨象した『資本論』と論理レベルの相違はあるが，この点では，『金融資本論』と『資本論』とは一致している。そして，この点においてレーニン『帝国主義論』は『資本論』とは異なっていることは勿論であるが『金融資本論』とも明確に異なっている。『金融資本論』では理論的解明の対象はあくまでも一国民経済の内部であり，世界経済における諸問題は，「金融資本の政策」論として扱われ，そこでの叙述はいわゆる「歴史的な個別記述」という性格をもつものとなっている。すなわち「先験的」な構成をもつ「一般理論」にたいして，経験的・具体的な，特定の時代・特定の諸国についての論述がなされているわけである。

V　『帝国主義論』の方法

『帝国主義論』に戻って考えてみよう。第1―7章の論理展開は概ねつぎのようなものである。生産と資本の集積→独占の形成→銀行の役割の変化→金融資本の形成→金融寡頭制の成立→過剰資本の発生→資本輸出→資本家団体のあいだでの世界の分割→列強による世界の領土的分割→再分割のための世界戦争。世界戦争によって論証が終結していることは，世界大戦の「真の階級的性格がどのようなものであるか」の解明という執筆のねらいに正確に

対応している。レーニンの場合,『金融資本論』のような重厚な論理の積み重ねの過程はない。また，集積からの独占の導出及び資本輸出から資本家団体のあいだでの世界分割の導出というような最も説明を要するところで「おのずから接近する」[17]というような叙述ですませているところもあるのだが,「ブルジョア統計の総括的資料」と「ブルジョア学者たちの告白」とを取り除いて現われてくるレーニンの論述の骨格はやはり一種の上向的展開を意図しているということもまた否定できない。

まず，金融寡頭制までの議論は『金融資本論』の論理を自分なりに（集積→独占の論理を機軸にして）整理しなおしたものといえる。したがって，ここまでの論理は「独占段階の一般理論」と呼ぶことができるであろう。ヒルファディングは「一般理論」の展開を国民経済という枠内に限定したのであるが，レーニンはこの枠を突破しようとする。それは資本輸出を契機としてである。彼は資本輸出を，その可能性と必然性との二段階にわけて考察している。

「資本輸出の可能性は，一連の後進国がすでに世界資本主義の取引のなかにひきいれられ，鉄道幹線が開通するか敷設されはじめ，工業の発展の基本的条件が保証されている等々のことによって，つくりだされる。また資本輸出の必然性は，小数の国々では資本主義が『爛熟』し資本にとっては（農業の未発達と大衆の貧困という条件のもとで）『有利な』投下の場所がないということによってつくりだされる」[18]

この論述は，資本輸出を国民的利潤率の差異から説くヒルファディングの論理を「可能性」と位置付けたうえで,「必然性」は資本主義の「爛熟」（独占の形成による過剰資本の発生）した段階で初めて説くことが出来るとしたものである。レーニンによる論理展開の領域の世界経済への拡張は，国民経

(17) *PSS.*, t. 27, str. 311. 22巻, 226ページおよび str. 364. 283ページを参照.
(18) *PSS.*, t. 27, str. 360. 22巻, 278ページ.

済内部での独占の形成を前提にしていることが特徴で，わが国で世界経済論構築に際しておこなわれる，マルクスの「経済学批判体系」のプランを基礎とした外国貿易論や世界市場論の展開とは全く異なっている。この点は資本輸出に続く「資本家団体のあいだでの世界の分割」の説き方にも現われている。

「資本主義のもとでは，国内市場は不可避的に国外市場と結びついている。資本主義は，すでにずっと以前に世界市場をつくりだした。そして，資本輸出が増加し，最大の独占諸団体のいっさいの対外的および対植民地的結びつきと『勢力範囲』とが拡大したのにつれて，事態は，『おのずから』これらの独占団体のあいだの世界的な協定に，すなわち国際カルテルの形成に近づいていった。[19]」

歴史的事実としての世界市場の存在は，独占以前の段階についても認めるのであるが，論理的には，独占を前提としてしか取りあつかわないのである。この点は帝国主義戦争についても同様であり，重商主義段階・自由貿易段階においても領土をめぐる帝国主義戦争が存在したことをレーニンは認めてはいるのだが，それを論理的に捉える作業はしなかった。

資本輸出→資本家団体のあいだでの世界分割→列強による世界分割→再分割のための戦争という論理展開は『資本論』や『金融資本論』における展開とは異質である。『資本論』や『金融資本論』の理論的部分での論理展開は，研究の出発点たる経験的世界・表象の世界に帰還するのではなく，「先験的」な構成がなされているかの如くにみえる「一般理論」の世界をつくりあげるのであり，そこにおいてはもはや表象において刻印されていた特定の時代・特定の諸国という相貌は消えさっている。『帝国主義論』における理論的展開の部分（第１－７章）の論理の到着点は，再分割のための世界戦争という，特定の時代・特定の諸国の間に生起している事象である。この点において『帝

(19) *PSS.*, t. 27, str. 364. 22巻，283ページ.

国主義論』の論述は，『資本論』の上向的論理展開を継承するという外観にもかかわらず，『金融資本論』のヒルファディングが「歴史的な個別記述」が扱うべきであるといっている経験的世界へとたどりつくのである。過剰資本の発生→資本輸出→資本家団体のあいだでの世界分割→再分割のための戦争，という論理展開は，その移行につれて「一般理論」的要素が希薄となり，「経験的な記述」の要素が強まっていく過程であり，むしろ列強による世界分割と再分割戦争という問題意識に強烈に規定された展開となっている。すなわち世界大戦→列強による世界分割→資本家団体のあいだでの世界分割→資本輸出→過剰資本→金融寡頭制という因果関係の遡及的な追究を単純に逆転した構成といえよう。

したがって，『帝国主義論』の理論的部分（第１－７章）におけるレーニンの論理は，(1)帝国主義戦争の経済的原因の究明（世界戦争→列強による世界分割→資本家団体のあいだでの世界分割→資本輸出），(2)『金融資本論』の成果を踏まえた自分なりの金融資本概念の確定（集積→独占→銀行の役割の変化→金融資本→金融寡頭制），(3)その基礎のうえに『資本論』の集積・集中論の延長上に論理を組みなおす（集積→独占→銀行の役割の変化→金融資本→金融寡頭制→過剰資本→資本輸出→資本家団体のあいだでの世界分割→列強による世界分割→再分割のための戦争），という手続きによって形成されたものだといえる。『金融資本論』の論理的部分が『資本論』の方法を相当に意識して書かれたものであるだけに，それを基礎としている『帝国主義論』の金融寡頭制導出までの部分も，『資本論』の論理の延長・発展としての性格，すなわち高須賀のいうより広い意味ではあるが「一般理論」としての性格を持った論理展開であるといえよう。資本輸出以降再分割戦争に至る論述は，国民経済の枠を突破する過程であると同時に，経験的世界へと帰還する過程であり，「一般理論」的性格は論理の移行につれて希薄となる。以上のように，『帝国主義論』は資本主義に関する「一般理論」たる『資本論』の論理をさらに上向させるという形をとりながら，論理の性質が変化していって経

験的諸事物の分析に至る，しかも論述全体は「一般理論」としての『資本論』の直接的延長上に位置するものと意図されている，という極めて独特な性格をもった著作ということがいえよう。このような『資本論』の「現状分析」への適用はレーニンの初期の代表作である「ロシアにおける資本主義の発展」における『資本論』の適用とも異なっている。

『帝国主義論』は上述のような独特な意図と論理的性格を持った著作であるだけに，『帝国主義論』から示唆をうけて「独占理論」や「世界経済論」を「一般理論」として説こうとする試みも，『帝国主義論』そのもののうちに根拠をもつのである。だが，その場合には，『資本論』と『帝国主義論』の論理的性格についての方法論的検討が不可欠であろう。

Ⅵ　む　す　び

ここでは，レーニンにそくして『帝国主義論』の論理展開と彼の帝国主義認識とのあいだに存在する若干の問題について考えてみよう。筆者はすでに前稿において，レーニンのカウツキー批判が，「段階と政策との一義的連結」という認識を基礎としていること，そしてこの認識は「帝国主義論」の論理展開の性格と関連していると言及した。その際には十分な考察をおこなうことができなかったが，その含意は以下のようなものである。『資本論』や『金融資本論』の理論的部分は，先にみたように「先験的な構成がなされている」かの如くにみえる論理必然性の世界である。それは経験的な表象の世界とは区別された「理論的実践」の所産としての世界である。『帝国主義論』の場合，論理の帰着するところは，経験的な世界そのものである。にもかかわらず論理が『資本論』の延長上あるという外観を呈しておこなわれることにより，再分割のための戦争という第一次世界大戦の現実が，不可避的なものとして固定的に捉えられることになった。

世界体制として帝国主義を捉えるレーニンの視角[20]からは，帝国主義の硬軟両様の多様な政策を把握することができるはずであるが，世界戦争という現

実に対する強烈な問題意識と論理必然的な展開方法は，レーニンによる政策認識を一面的なものにしているのではないだろうか。

類似の事情は，民族問題についての把握に際しても見いだされる。レーニンの民族問題把握は世界体制としての帝国主義認識と密接に結びついているものであるが，彼の民族問題認識は『帝国主義論』における段階論的な認識におさまらないものをもっているように思われる。たとえば「マルクス主義の戯画と『帝国主義的経済主義』とについて」(1916年8—10月執筆，以下「戯画」と略記）におけるつぎのような論述がそうである。

「抑圧民族の労働者の現実の地位と，被抑圧民族の労働者のそれとは，民族問題の見地からみて同一なものであろうか？

いや，同一ではない。

(1)経済上の相違　……経済的資料によると，『職長』にすすむ割合，すなわち労働者階級の貴族に出世する割合は，被抑圧民族の労働者よりも抑圧民族の労働者のほうがより大きい。これは事実である。抑圧民族の労働者は，被抑圧民族の労働者（と住民大衆）を略奪するうえで，ある程度，自国のブルジョアジーの共犯者である。

(2)政治上の相違　抑圧民族の労働者は，被抑圧民族の労働者にくらべて，政治生活の多くの分野で特権的な地位をしめている。

(3)思想上または精神上の相違　抑圧民族の労働者はいつでも，学校でも実生活上でも被抑圧民族の労働者を軽蔑または軽視する精神で教育されている。たとえば，大ロシア人のあいだで教育されるか，生活してきた，すべての大ロシア人は，このことを経験している。[21]」

これはロシアにおける民族問題についての叙述であるが，労働者階級の国際的連帯に楽観的であり，日和見主義の基礎を帝国主義による「プロレタリ

(20) 拙稿「『帝国主義論』とレーニンの世界認識」『社会思想史研究』6，1982年を参照。
(21) *PSS.*, t. 30, str. 107—108. 23巻，53—54ページ。

アートの上層」[22]に限定している『帝国主義論』での把握とは質的に差があることは見逃せない。この叙述では，抑圧民族の労働者と被抑圧民族の労働者のあいだにある断絶をより深刻に捉えているし，民族問題の存在は独占段階に単純に結びつけられてはいない。

それに対して「社会主義と戦争」(1915年8月)のつぎの叙述は『帝国主義論』での論理に対応している。

「帝国主義とは二十世紀にはじめて到達した資本主義の最高の発展段階である。資本主義は民族国家をつくらずには封建制度を打倒することはできなかったが，いまでは，その古い民族国家が，資本主義にとって窮屈なものになっている。……地球のほとんど全体が，あるいは植民地という形で，あるいは金融的搾取の無数の糸で他国をがんじがらめにするという方法で，これらの『資本の支配者』のあいだで分割されてしまった。独占への志向，投資地域，原料入手地等々を略取しようとする志向が，自由貿易と自由競争にとってかわった。資本主義は封建制度との闘争のさいには諸民族の解放者であったが，帝国主義的資本主義は諸民族の最大の抑圧者にかわった。資本主義は進歩的なものから反動的なものにかわった。」[23]

確かに世界体制としての帝国主義はとらえられているが，このような把握は民族問題の認識において「戯画」における深刻さには達っしてはいない。「資本主義は封建制度との闘争の際には諸民族の解放者であった」というときの「諸民族」とは，後に「帝国主義民族」あるいは「抑圧民族」になりおおせることのできた民族であろう。「帝国主義的資本主義は諸民族の最大の抑圧者にかわった」というときの「諸民族」とは，独占段階での「被抑圧民族」を意味しているのであるが，彼等にとって「自由競争の段階」の資本主義は「解放者」であったであろうか。このように問題を提起すれば資本主義

(22) *PSS.*, t. 27, str. 402. 22巻，324ページ.
(23) *PSS.*, t. 26, str. 313－314. 21巻，307－308ページ.

の世界体制について独占段階以前についても目を向けざるをえないはずであるが，「資本主義は進歩的なものから反動的なものにかわったという」ドグマはこれをはばんでいる。これは，マルクス・エンゲルスの言説を根拠として祖国防衛という立場を正当化しようとしたSPDの右派を批判する際に，マルクス・エンゲルスの言説は当時は正しかったが，時代の推移によって現在その立場をそのまま継承するということは誤りであるという論法[24]をもちいたレーニンの政治的な態度を支えるものでもある。そして『帝国主義論』における独占・金融資本の成立を前提にして世界体制としての帝国主義を説くという展開方法は，このドグマの経済学的な基礎付けという意味を持っているのである。

『帝国主義論』の論理展開においては世界体制としての帝国主義は，独占段階としての帝国主義を不可欠の論理的前提としてそこから導出されるという仕儀になっているが，この論理はレーニン自身の民族問題認識の深みにまで到達していないのではなかろうか。そして論理必然性の外観をまとった『帝国主義論』の展開方法は，政策論の場合におけると同様この限界を固定化する方向にはたらいている。この意味で，段階論としての帝国主義論の完成としてレーニン帝国主義認識を意義付けている従来の帝国主義論史研究の評価は再考されるべきであろう。レーニンの民族問題に関する議論は独占段階に限定されない世界体制としての資本主義＝帝国主義という認識の方向を断片的にではあれしめしている。近年第三世界におこっている新たな帝国主義研究の流れは，レーニンのこの方向を引き継ぐものとみなされる。その場合，

(24) マルクス・エンゲルスの民族問題に対する態度そのものは本格的検討を要する問題であるが，SPD右派の解釈そのものが必ずしも妥当なものとはいえなかったことについては，とりあえず，Davis, H. B., *Nationalism & Socialism: Marxist and Labor Theories of Nationalism to 1917*, Monthly Review Press, New York and London, 1917, pp. 27—51. 邦訳『ナショナリズムと社会主義』岩波書店，1969，55—98ページを参照．

世界体制としての資本主義＝帝国主義の認識にとって『資本論』はどのような理論的意義を持つのか，またそこでの段階区分はどのようになされるべきなのか，が改めて問われなければならない。歴史認識と『資本論』という旧くて新しい問題が，新たな次元でまた登場するのである。